

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十三年八月一日発行(毎月一回一日発行)
第十八巻第四号(通巻第二〇八号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第 208号

8. 2011

酸^すぐり
塊^り

品川 鈴子

油照り外^と出^でに半ときゆとりもち

水槽に目高の半ば死す日射し

腹裂けし目高一匹浮く訃なり

霍乱に白紗包みの訣れなる



朝顔が挨拶代はり背戸隣り
東北・上越・山陽線みな猛残暑
台風釣公園を魚飛ぶ
衣被つるりと脱皮同窓会
信濃なる酸塊抓めば鉄漿おはぐろに
追慕会裾にびつしりみのこづち



玉鈴

吟

愛媛 武智 恭子

かたまつて光の中に葦咲く
風止みて小鳥とび交ふ長閑なり
どの道も白木蓮の目立ちをり
里山を出れば植田の続きたり
小春日に震災義援寄付をする

兵庫 田中 佳子

住まぬ庭誰が撒きしや罌粟の花
牛蛙 対角線に太き声
青柚の香膳に広がる疎水端
白雲の湧き立つごとし花水木
春雷に背中押されて一人立ち

兵庫 恒成久美子

春の昼檻の猛獣動かざる
重たげな麒麟の臉春の空
白犀の尻尾ちよるちよる山笑ふ
遠足の園に海驢の雄叫びよ
春日あびパンダが笹を選び好み

大阪 角谷美恵子

南無阿弥陀仏ゆるり種蒔き和紙の鉢
麩饅頭うららに暮れる京のにぎはひ
燕来る老舗の奥に長者番付け
多佳子の忌茶柱の立つ夕間暮れ
遠泳の深き息継ぎ太鼓の音

愛媛 年森 恭子

うつすらと腋にはりつく薄暑かな
山ガールてふ色彩の登山客
空豆の食後産めりと母の伝
仰臥する腹上を風夏座敷
北校舎側一面の麦の秋

兵庫 内藤 三男

裏庭の猫の抜け道雪柳
耕せる一打の鎌の軽さかな
病むわれに親しき山の芽吹きけり
永き日や堤の下のランドセル
芝青む児は父の背を跳び箱に

兵庫 中尾 廣美

春の雹昨日の言葉忘れたく
囀を十人が聴くヨガに伏し
目纏ひをはらひてテラスティータム
蹲ひて杉菜を採りぬ願かけつ
杉菜干すほのかな香り縁先に

兵庫 中島 節子

無名庵に俳徒待ちある蝸牛
くちなしの朝から匂ふ雨催ひ
梅雨明けを知るや知らずや蝉の鳴く
蚊遣り香匂ひの違ひ嗅ぎわけて
地の人はうど菜と呼べり猪独活を

大阪 中島 霞

武具飾る爺のこゑ子の笑ひ声
地下出口違へ見知らぬ景薄暑
すかんぼや濠の土手行く縄電車
囀りの杜よりこぼれささら波
作付けの展望見えず苗代寒

大阪 中田 寿子

リラの花ワツフル旨き喫茶店
黄砂来て落書されたボンネット
石仏の径を清めて青嵐
薔薇似合ふリズムテイラーやふいに逝く
粗織のランチョンマット夏来る

神奈川 永塚 尚代

四肢伸ばす体育館につばめ舞ふ
苺煮てひねもす甘き香の中に
ぢいちやんの隣取り合ふ子供の日
子供の子育てをよしとする
うきうきと施錠たしかむ夏帽子

大阪 野口喜久子

二周目の乗馬は笑顔子供の日
踏切が撥ねて若葉の街つなぐ
手土産の海光放つ初鯉
京格子衣冠を正す白牡丹
茎立に履歴書用紙よく売れる

兵庫 蓮尾みどり

礼参り丁度見ごろの千年藤
走り根にくちばし拭う羽抜鳥
羽抜鳥鳴き羽抜鳥驚かす
鳩一羽見ぬ神苑の羽抜鳥
人馴れてわがものがおの羽抜鳥

兵庫 長谷川 鮎

ハイビスカス戦場からの絵手紙も
草を刈る無縁仏の墓の山
建設の鉄骨歩く雲の峰
老と兎の輪投げ対戦汗流る
鬼虎魚我口腔レントゲン写真

兵庫 林 哲夫

兄の書を掛軸として春彼岸
永き日やお詫びの手紙墨で書く
鮮やかな蝶々追ひて児に奪られ
あぢさゐの色気にしつゝ愚痴ばなし
鉛筆のやうな筭味噌和へに

兵庫 林 美智

公園はおしくらまんじゆ子供の日
牧師へとめざす娘の聖五月
パスタ茹で留守をあづかる汐干狩
訪ふ人も稀なる庵に目白鳴く
流行も少しとり入れ風薫る

愛媛 福島 松子

ぼんと一つ頭叩かれ葱坊主
順繰りに雀砂浴び夏浅し
娘夫婦同居始まる桐の花
げんげ田のぼつりぼつりと農の町
蒲公英や丸く大きく時待てり

愛媛 福田かよ子

余白多き若人の夢上り藤
五月雨の止みて雲湧く里の山
過去すべて吸ひ込む景色藤の花
お一人様ばかりの茶房白牡丹
黄沙降る気怠き日なり犬眠る

兵庫 藤井久仁子

春愁ふ皮の鞆の重たさに
春光に釣人の竿飛び交へる
誉められも腐されもせず葱坊主
急く用を次つぎ熟し豆の花
新築の屋根の尖りて夏はきぬ

兵庫 藤田かもめ

カリヨンの響く城跡つちぐもり
蜜皿に群るてふてふ玻璃館
擬態てふ忍び技あり木の葉蝶
幼子の尿ゆまりに蚯蚓伸び縮み
葱坊主見上ぐ没日の二上山

兵庫 史 あかり

鯉のぼり散髪嫌ひの男の子
ドーナツの穴まで食べて子供の日
幕間の予約のランチ新樹光
マネキンの四肢伸び伸びと日焼して
ごわごわの空手着汗を吸ひ始む

兵庫 古井公代

城門をくぐる校舎の遅桜
人増えて燕の減りし街となり
豌豆むく負けるが勝ちと銘じつつ
オリジナル落煮炊きあぐ誕生日
藤波や土器かわらけ投げは湖に向き

大阪 古林田鶴子

梅雨闇に化粧なほしの紅たてる
梅雨晴れま混み合ふ医院の世話ばなし
影すずしバス待つ児らのジャンケンポン
夕風や潮の香の濃くとどまりぬ
五月田は機械で植ゑてくるひなし

香川 細川知子

畳み方知らぬ娘ら花衣
聖五月バージン・ロードいと長し
複眼欲し青嶺連山見回すに
底ぼんと打ちて茶詰の量り売り
青あらし庵さながら難破船

兵庫 細野恵久

赤手蟹そは爪紅の褪せざるや
西日中貨物列車が遅々と過ぐ
行水に誘へばシャワー浴ぶと言ふ
夕菅や西に太陽薄く透き
天蓋を戴くごとし揚花火

愛媛 松井洋子

護摩の火に焚かれる檜葉に春惜しむ
さみどりの蛙の守る童女墓
縁日の庫裡裏暗し蝸牛
山藤の村に出征記念の碑
青嶺にて問はず語りの若き日々

埼玉 松本清川

灰白き卵の花匂ふ宵の口
日面の実梅ぐんぐん太りけり
通る人を数へる園児花水木
満天星の落花を踏みて園巡り
緑立(余計に緑地帯)つ地にも天心六角堂

愛媛 松本恒子

音たてて蚯蚓の夢を裏返す
大甕に見よとばかりに朴の花
山椒の芽摘みてしみじみ夫は亡き
老い順に逝かぬが不幸実梅落つ
蜘蛛の囿に顔面とらる朝ぼらけ

愛媛 三浦澄江

雲水の走る廊下に初音聞く
花は葉に参道と言ふ白き道
たらの芽や生涯生れし鉾山やまに住む
来ては去る蝶には蝶の道ありて
歳時記を枕に昼寝の気まま妻

兵庫 三枝邦光

蹲踞の水かげろふや夏隣
錆ふかき口ダンの座像花水木
雨に散る芍薬一花金の薬
出刃の背に女の氣迫初鯉
母の日や今も机に鯨尺

鈴の奏

品川鈴子選

いかなごの舟放たれて先競ふ
落椿泣くがごとくに野の仏
兵庫 仲田 眞輔

オランダの児になりすましチューリップ
がれき山いつ除かると遠蛙
抱き合はずして別れけり濃山吹
兵庫 平田恵美子

啄木忌就職難は学士にも
塾弁と呼ぶ箱の中若牛蒡
帆柱の揺れる音あり春の潮
三十余名のまれし斜面芝桜
兵庫 北村 和代

また訪ねん夫の背丈の糸桜
春地震に男の涙幾度ぞ
襖襟替へ抱きし児は早や一年生
頭陀袋黒から白に更衣
兵庫 長谷川としゑ

亀の子にえさやれど鯉横取りす
しじみ蝶心ならずも踏みつけし
神戸まつりサンバを仕切るブラジル人
兵庫 大西 和子

風薫る県庁坂に孫文碑

欧風の厩舎ギャラリー窓若葉

夏灯忍ばせており飼葉桶

柿若葉峠の茶屋の堅き椅子

越前壺牡丹の映ゆる肌理粗し

芍薬の容姿端麗先ず仏花

芍薬を咲かせ背筋の曲りがち

運転の初心者マーク若葉騷

詰襟の身について来し若葉風

山瀬風瓦礫残して消えし街

小流れの微かな響き木下闇

主宰句碑敷玉石に風光る

浮台餌を白鳥鯉に麗けし

板橋は島の波止場よ蜜柑舟

目高鉢机上に移し眩きぬ

大津波に負けぬ鳴き浜夏兆す

兵庫 土屋 青夢

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 〱十五句 奥田 妙子 〱

*選句は全て 品川鈴子

オランダの児になりすましチューリップ 仲田 眞輔

春地震に男の涙幾度ぞ 北村 和代

チューリップは老人にも子供にも愛される春の代表格。中央アジア原産のユリ科の球根は赤白黄色の鮮やかな6弁の鐘形の花に、葉も披針形で単純な可愛い姿だが、オランダで改良が進められて、珍しい品種も極めて多い。アムステルダムの花市場は広大な迷路で、今や世界の本場めく。遠い日本でもチューリップの売り子は民族衣装と金髪の鬘があればオランダ娘として売り上げも上々。

東日本を襲った春の大地震は、未だに余震も収まらぬま、追いつきの津波の恐ろしさや重なる放射能洩れの災害をもたらし、多くの人命を失い、誰しも悲しみを抱え込んだ。人目を憚る男の涙こそ、その一粒の重さを物語る。かつての我がごととして神戸っ子は共有し、身につまされる。

塾弁と呼ぶ箱の中若牛蒡 平田恵美子

頭陀袋黒から白に更衣 長谷川としゑ

女性は袋物が大好き。洋服に合わせて鞆まで更衣とはおしやれ。洋服も鞆もいくら有っても邪魔にならない。鏡の前であれこれ持ち換えてみて、精々お楽しみ下さい。

県公館玫瑰の咲く車寄せ 大西 和子

放課後も学習塾へ次々と通う子は、家で団欒する夕餉のゆとりも無く「塾弁」と呼ぶ弁当に頼る日々。育ち盛りの食欲を満たすのにどんな献立を盛り込むのか、そっと蓋を開けるときの夢一杯。新牛蒡の香に根菜類の栄養価が高く「ごんぼ食ってごんぼろ」の俗謡もあるが、はたして現代っ子の好みや如何に。

公館は海寄りにあるのでしょうか。広々とした車寄せには玫瑰が満開。此処に滑り込んで来る車からは、どんな立派な方が降りて来られるのでしょうか。令夫人もご一緒で

しょうか。

芍薬の容姿端麗先ず仏花

木曾 鈴子

今年も丹精して育てた芍薬が美しく咲いた。作者は、先ず一番姿の良いのを切花にしてお供えにした。見事な出来映えに作者の満足感が伝わって来る。仏様もおよろこび。

詰襟の身につけて来し若葉風

木野 裕美

一番年上の男のお孫さんでしょう。元気に育ってくれて、今年からは中学生。やっと詰襟が良く似合う様になつてくれたという作者の感慨が若葉風からも感じられ、若返られる一句。

主宰句碑敷玉石に風光る

大西ユリ子

四国は愛媛県。瀧の宮公園に

〈雲海に浮く石鎚の巖頭 鈴子〉

の主宰第一句碑が堂々と建っている。敷かれた玉石に麗らかな春の陽光が差し、心地良い風がそよそよとわたる、その日は、訪う人たちを祝福するかの様な良い日和だった。作者の良き師に恵まれた喜びが伝わって来る。

家潰え少年草笛吹きつ去る

土屋 青夢

東日本大震災で家が潰えてしまったのだろうか。少年は何も語らず、草笛を吹きながら去っていった。少年の深く、大きな悲しみを草笛に託して吹き込んでいるこの情景は、誠にもの淋しく、つらい句である。

茶室へと続く飛石春時雨

福島 悠紀

大きな庭園の中に茶室が作られている。茶室へと続く飛石に折りしも春時雨がかかり、一層風情が感じられ、ゆったりとした気分になる。着物で出かけられたのか、洋服なのかしら。足下に気を付けながら、作者は楽しいひとときを過ごされた。

(以下略)